

小学校体育科：「幅跳び」
の授業における子どもたちが織り成す豊かな動きと
学び

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 望月, 正, 黒柳, 哲也, 井鍋, 佐紀乃, 赤田, 信一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010318

小学校体育科；「幅跳び」の授業における子どもたちが織り成す豊かな動きと学び

望月 正* 黒柳哲也* 井鍋佐紀乃* 赤田信一**

The creative physical activities and learning that children produce in long jump in elementary school physical education

Tadashi MOCHIZUKI* Tetuya KUROYANAGI* Sakino INABE* Shinichi AKADA**

キーワード：体育の授業 幅跳び 子どもたちの動きと学び

I はじめに

本稿は、小学校3年生での体育の授業「幅跳び」の実践場面における子どもたちの“動き”に着目し、そこに内在する子どもたちの豊かな“学び”を読み解いていくものである。

さて、平成23年度から全面実施されている小学校学習指導要領；小学校学習指導要領解説（体育編）には、第3学年及び第4学年の体育領域の目標、ならびに幅跳びの扱いに関する内容として、次のような記載がされている。

第3学年及び第4学年

目標

- (1) 活動を工夫して各種の運動を楽しくできるようにするとともに、その基本的な動きや技能を身に付け、体力を養う。
- (2) 協力、公正などの態度を育てるとともに、健康・安全に留意し、最後まで努力して運動をする態度を育てる。
- (3) ～保健領域～

内容

C 走・跳の運動

(1) 技能

幅跳びでは、短い助走から踏み切って跳ぶこと。

ウ 幅跳び

短い助走から調子よく踏み切って遠くへ跳ぶ。

【例示】○短い助走での幅跳び

- ・5～10m程度の短い助走から踏み切り足を決めて前方に踏み切り、遠くへ跳ぶこと。
- ・膝を柔らかく曲げて、両足で着地すること。

(2) 態度

運動に進んで取り組み、きまりを守り仲よく運動をしたり、勝敗を受け入れたり、場の用具の安全に気を付けたりすることができるようにする。

ア かけっこ・リレーや小型ハードル走、幅跳びや高跳びに進んで取り組むこと。

イ きまりを守り、友達と励まし合って練習や競走（争）をしたり、勝敗の結果を受け入れたりすること。

ウ 用具の準備や片付けを友達と一緒にすること。

エ 場の危険物を取り除いたり、用具の安全を確かめたりすること。

(3) 思考・判断

自己の能力に適した課題をもち、動きを身に付けるための活動や競争の仕方を工夫できるようにする。

ア 走の運動や跳の運動の動きを身に付けるための練習の仕方を知り、自分の力に応じた練習方法や練習の場を選ぶこと。

イ 走の運動や跳の運動の動き方や動きのポイントを知り、自分の力に合った課題を選ぶこと。

ウ 仲間との競走（争）の仕方を知り、競走（争）の規則を選ぶこと。

記載された内容からは、小学校中学年という発達段階を踏まえる中で、幅跳びの動きや技能の修得についての“基本的”な学習が求められていることが読み取れる。それは助走に関する「“短い”助走から踏み切って跳ぶ」という記載、また、【例示】による「踏み切り足を決めて”前方に踏み切り、遠くへ跳ぶこと」という記載からも察せられるところであり、この“短い助走”と“決められた踏み切り足”による、まさに「基本的な幅跳びの動きや技能の獲得」が当該授業において目指されているとも言えよう。

しかしその一方で、「思考・判断」の記載においては、比較的高度で発展的な学習が求められていることが読み取れ、それは「動きを身に付けるための練習の仕方を知り、自分の力に応じた練習方法や練習の場を選ぶこと」や「動き方や動きのポイントを知り、自分の力に合った課題を選ぶこと」、さらに「仲間との競争の仕方を知り」という記載からも察せられる。

ここの「自分の力に応じた～」や「自分の力に合った～」に見合う思考・判断の学習を展開するには、まずもって、子どもたち自身が、“自分の力”の現状を見極める活動が不可欠であろう。「幅跳び」における“自分の力”を、見極めるためには、おそらくは相当数の

幅跳びの試技が必要であり、それは「ただ試しに跳んでみる」という安易な感覚からの試技ではなく、「自分は今のくらいまで跳べるのか、一度思いっきりチャレンジしてみよう。」といった“自分の力”を見極めるための意欲的な取り組みが必要となるであろう。そして、自分の動きの課題を発見する活動や動きのポイントを知る知的な活動を踏まえながら、現状の“自分の力”をさらに高めていく練習方法を考えたり選んだりする活動への展開が期待される。同時にそれは、仲間と相談・競争したり、試行錯誤したりしながら上達していく過程の中で、また新規に生まれてくる課題に立ち向かう営みが、脈々と発展的に繰り返されていくものでもあろう。

その意味では、この幅跳びの授業では、「基本的なものだけでなく、「自分の力を見極める活動を踏まえた、知的で発展的な学習」が目指されているとも言えよう。

いずれにしても、体育の授業に限らず教育活動というものが「基本的な学習」と「発展的な学習」がバランスよく共存しながら展開されるものであるとするなら、授業のなかで育ちゆく子どもたちの個々の特徴を踏まえながら、その実態に応じた質の高い体育の授業の実践、楽しい体育の授業の実践が、期待されるところである。

静岡大学教育学部附属静岡小学校体育部においても、子どもたちの学びの深まりを目指した幅跳びの授業研究が進められており、平成24年11月には全校的な研究授業のなかで、「どうしてもっと遠くへ跳べるかな（幅跳び）：7時間扱い」を実践した。ここでは『問いをつなぐ学び』という附属静岡小の研究テーマのもと、子どもたちの様々な問い・探究過程に対して、教師が寄り添い、適切な支援を加えることで、その子どもたちに豊かで多様な動きを表出させていった。

実践の詳細については「体育科学習指導本時案」また「追究過程」を参照されたいが、本稿ではその実践場面において表出された子どもたちが織り成す豊かな動きに着目し、それらを分析・検討するなかで、実践された「どうしてもっと遠くへ跳べるかな（幅跳び）」の授業における子どもたちの学びの豊かさと、この授業に含まれるさらなる授業開発の可能性の芽を見出ししていきたい。

II 豊かな動きと学びを引き出すための配慮・支援

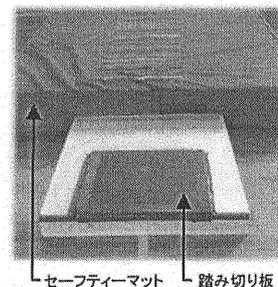
1) 基本的な場の設定と安全対策

今回の「どうしてもっと遠くへ跳べるかな（幅跳

び）」の授業の実施場所は、体育館とした。一般的には、幅跳びの授業は屋外の砂場を利用することが多いが、下記の安全対策を施しつつ、屋内で実施する場合の幅跳びの授業の可能性を探った。

着地の場所の安全対策としては、踏み切り後に着地の可能性がある場所に対して、セーフティーマット（厚さ約30cm～40cm）を敷き詰め、跳んでいく方向の床面を広く覆った。これにより、着地の際の体の痛み（足や臀部）の軽減を図った。

また、踏み切りの場所の安全対策としては、60cm四方の滑り止めの効いた踏み切り板を用意し、それを高さ約15cmの木製の台に固定し、その台をセーフティーマットにつけることで踏み切り時の足のすべりを無くした。（右写真）



運動の技能面での安全対策としては、「両足でしっかりと着地すること」、「膝を柔らかく曲げながら着地すること」を徹底させた（写真A）。

加えて、着地点には色を変えたテープによる記録線を示すことにより、試技をした後にすぐ、自分どれほど跳べたかを確認できるようにした。

以上のような場の設定と安全対策によって、子どもたちの積極的な学習活動を保障することを目指した。

（写真A：1から3への連続写真）



※跳躍と着地場面の連続写真（左から右へ）。膝を柔らかく曲げていく両足での着地により、安全性を高めた。セーフティーマットに守られ、仮に臀部から着地することがあっても、屋外の砂場で時折その発生が報告される尾てい骨骨折等の臀部のけがの危険性は低減できるものと考えられる。また、着地点に記録測定用の線が明示でき、跳躍のあと、自分の記録が瞬時に確認できる。加えて、セーフティーマット上への着地ということで、砂が靴や衣服内に入ることは無いことから、跳躍の後、次の練習にすぐに取り組むことが可能である。

2) 学び合い、高め合いへの配慮・支援

遠くへ跳ぶための効果的な動きの探究過程において、その時点の子どもたちの「問い」が明確にされ、解決

に向けての積極的な学習が展開されるように、次のような配慮・支援をした。

まず、相棒（ペア）を組む中で、練習や記録取りを行っていくものとし、お互いの動きを観察し合ったり、お互いが意味づけた効果のある動きをアドバイスしたりしながら、学習が進められるようにした（写真B）。また、両者の跳躍記録による得点を合算し、その合計得点を他の相棒の得点と競わせる環境を作ることで、相棒同士が「協力しながらお互いに高まり合おう、記録を伸ばそう」とする意識が維持されるようにした。

（写真B）



※相棒の跳躍を寄り添うように観察したり、跳躍の成功共に喜び合ったりしながら、学習を進めていった。課題が見つかった場合は、それを指摘し合いながら、お互いの記録向上を目指していった。

なお、この時の記録の得点化については、以前実施した立ち幅跳びと50m走のタイムから算出した各人の目標の目安^{注1)}となる跳躍距離の基準に照らして各人に応じた得点を与えるものとした。よって2mの距離を跳躍したとしても、子どもに応じてその得点は異なってくる。

また、授業の導入場面や中盤において、子どもの幅跳びの映像をモニターで適宜提示し（写真C）、その動きを学級の全員で評価・分析することによって自分自身や相棒同士のその後の練習課題を明確にし、意識的で活発な学習が展開されるようにした。加えて、相棒同士によるその意識的な学習の様子を教師がタブレット型のPCで適宜撮影・提示することによって、子どもたちが自分の幅跳びの様子をリアルタイムに観察・確認できるようにし、練習効果が高まるよう配慮した。

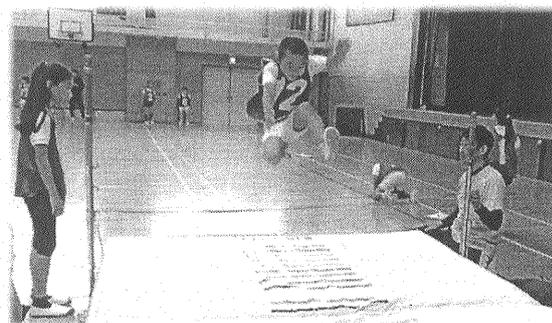
（写真C）



※左写真は大型モニターを利用し、仲間の跳躍の長所を学級全体で確認している様子。右写真はタブレットPCで撮影した映像を、跳躍後すぐに子どもたちに視聴させることで、相棒同士の評価・分析の取り組みを活性化している様子。ここでの、評価・分析のノウハウや観察の視点が、この後の相棒同士での学習に活かされていく。

加えて、練習のための場所づくりの配慮として、1) 踏み切り板に踏み切り足を合わせるための練習コース、2) 踏み切った後に足を前方へ高く上げていく感覚を意識するための練習コース（進行方向に対して直角に設置したゴムのロープを越えていく練習）を用意した（写真D）。その場において教師は、子どもたちの主体的で積極的な活動を見守り、遠くへ跳ぶための効果的な動きに対する探究の姿を褒めたり認めたりすることで、子どもたちの学習への意欲が維持されるようにした。また、ゴムのロープの高さの設定・調節については、子どもたちの動きの探究がより深まっていく適切・最善な高さを求め、積極的に関与するようにした。

（写真D）



また、助走距離については、子どもたちの探究過程の中で、自分に合った（相棒に合った）適切な距離を試行錯誤しながら見つけていけるよう支援した（写真E）。学級全体や個別的な対応の中で、子どもたちからの提起された考えでもある「助走で勢いをつけると、遠くへ跳べるから、助走は長いほうがいい」、「スピードを出して、助走したほうが遠くへ跳べていい」、「距離が長すぎたりスピードが出すぎたりすると、今度は踏み切りが難しくなって跳べなくなる」等々の子どもたちの考えを、重要な「問い」として明確に位置づけ、試技の回数と時間を十分に保障しながら、その解決に向けた主体的で活発な学習が展開されるようにした。

（写真E）



※助走距離については、その距離を少しずつ長くしながら跳躍を繰り返すことで、子どもたちは自分にあった距離を見つけていった。また、相棒同士で助走スピードについても観察・評価を行った。写真の左は約5m、右は約10mの助走距離での試技の様子。その後、約16mの距離からの助走も試していた。

また、その授業時間の目標や課題、成果や記録を書き込んでいくワークシートを用意し、子どもたちの「遠くへ跳ぶための効果的な動きの探究」が、一時間ごとに明確な目的意識をもって展開されていくようにした(写真F)。ワークシートに書き込まれた内容は、授業中・授業後に教師により確認され、学習を深めていくための適切な支援に役立てられた。加えて、ワークシートは相棒とのコミュニケーションツールの役割も担っており、部分的でもその記載内容を相互に確認し、相棒が「今日どんな課題をもって動きの探究を進めていくのか」についての相互理解を深められるようにしておくことによって、授業中の相手の試技に対する助言が、相手の目標や課題に対応した内容となるように配慮した。端的に言えば、「助走のスピードを落とさない」という目標・課題がワークシートに記載された際、それを相棒が確認できていれば、相棒による観察の視点は必然的に「助走スピード」に向けられ、それに対する適切な評価・助言が行われやすくなるということである。試技者が意識している目標・課題と、観察者の観察の視点を同調させることは、ペア(相棒)学習の効果を高めるためにも重要なことであろう。

さらに(前述したことではあるが)、その日のお互いの記録に加え、記録から算出された得点を、相棒(ペア)との「合算」としてワークシートに明記することにより、その得点を「これまでの自分たちの得点」や「他の相棒たちとの得点」と相対的に比較できるようにした。合算した得点での比較によって、自分たちの今日の「遠くへ跳ぶための効果的な動きの探究」の評価が、「相棒としての一体感」を持った形で行われるようにしたのである。この一体感がその後の相棒同士の関わり・探究活動に良い影響を与え、より活発な学習が展開されることを期待した。

(写真F)



※ワークシートの内容をお互いに確認し合い、相棒としての仲間意識(一体感)を高めながら、その後の探究活動を進めていった。

III 子どもたちが織り成す豊かな動きと学び

7時間構成の授業場面から、時系列に沿う形で、抽出児の「幅跳び」の動きそのものに着目し、その学びを読み解いていく。

子どもたちは、相棒との関わりの中かで、試行錯誤を繰り返して、自分の「遠くへ跳ぶための効果的な動き」を導いていった。そこには、「自分の力に応じた練習方法とはどのようなものなのか」という問いや、「自分に合った課題とはどのようなものなのか」という問いをつないでいきながら、今回の授業の最も大きな「どうしたらもっと遠くへ跳べるかな」というテーマ(問い)に対して、意欲的・主体的に立ち向かっていく姿があった。

授業中における子どもたちの全てを捉えることは不可能であるが、授業実践と授業観察による分析を踏まえて垣間見ることのできる「子どもの豊かな動きと学び」について、部分的・断片的ながら、その具体を以下に提示したい。

<Aさん(17番)の豊かな動きと学び>

① 踏み切りの方について

準備運動を行い、今回の走り幅跳びの授業の進め方や安全のためのルールを確認したのち、Aさんの学びがスタートした。

第一時では、早速「遠くへ跳びたいな」という思いを膨らませ、「どうしたらもっと遠くへ跳べるのかな」と問いを持ち、助走の距離を、5m、10m、16mと少しずつ伸ばしながら、その助走スピードも速めていき、「長い距離からのスピードの速い助走が、遠くに跳ぶことにつながるのではないか」というAさんの動きの探究が行われていった(前述の写真E)。

ただ、以前行った「立ち幅跳び」の動きのイメージが残っていたのか、ここでの踏み切りが「両足踏み切り」となっており、長い距離からのスピードの速い助走をしても、踏み切りの手前になると両足を揃えるために減速してしまい、結果的に遠くには跳べない状況が連続6回ほど続いた(写真G:両足踏み切りの様子)。

「片足踏み切り」が行われたのは7回目からの試技となった。その後、「片足踏み切り」と「両足踏み切り」の両方の跳び方を、比較するように何度も試し、その試行錯誤の結果、「片足踏み切り」の方が遠くへ跳ぶことを確認していった。最終的には、授業の最後の2回分を「片足踏み切り」による試技でまとめ(この日は計14回の試技が行われた)、動きの探究として、「片足踏み切りの方が、助走の距離とスピードから生まれる助走の勢いをそのまま跳躍に活かすことができるので、遠くまで跳ぶのに効果的である。」ということAさんは学んでいったと考えられる。

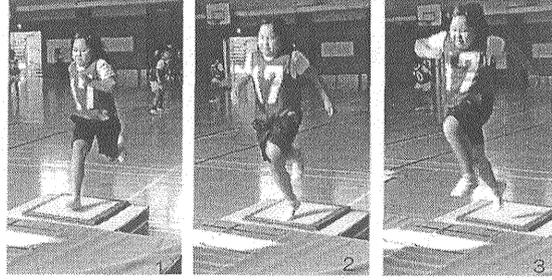
写真G (1から6への連続写真)



写真H-1 (左足踏み切り：1から3への連続写真)



写真H-2 (右足踏み切り：1から3への連続写真)



② 踏み切り足について

第二時から第四時においては、第一時の「片足踏み切り」の効果の学びを踏まえ、次のような課題意識による動きの探究が行われていった。

それは、「右足と左足とでは、どちらの方が自分の力を最大限発揮でき、結果として遠くへ跳べるようになるのか」、「踏み切り板をどう踏み込めば（踏み切りの強さ）、結果として遠くへ跳べるようになるのか」、「空中姿勢において、振り上げ足をどうすれば、結果として遠くへ跳べるようになるのか」等である。

写真H-1とH-2は、「左足踏み切り」と「右足踏み切り」の2種類の動きであり、跳び上がりの際の上半身の使い方も異なる。Aさんは相棒からの観察・評価も受けながら、両方の跳び方を比較するように何度も試し、その試行錯誤の結果、「右足踏み切り」の方が遠くへ跳べることを確認していった。これ以降の試技はほとんど右足踏み切りとなり、動きの探究として、「右足踏み切りの方が、今の自分の力を最大限発揮できる跳び方であり、遠くまで跳ぶのに効果的である。」ということ学んでいったと考えられる。

なお、Aさんは跳躍の際の右腕の使い方が特徴的であり（写真H-2の3）、肘を曲げた状態で腕を横に上げて、肩全体で上半身を持ち上げていくような動きが見られる。本時では、このような特徴的な動きも、子どもの探究の過程のありのままの姿として尊重・認めながら授業を進めていった。

③ 踏み切り板への踏み込み方と空中姿勢について

前述の「右足踏み切り」の効果の学びを踏まえ、

Aさんの次の課題意識は「踏み切り板をどう踏み込めば（踏み切りの強さ）、結果として遠くへ跳べるようになるのか」に移り、それに向かった学びが展開された。

写真I (a. b. c) は、踏み切り板に右足を踏み込んでいく時の最後の一步の写真であるが（3枚とも別々の試技）、助走のスピードを維持しながら、かなりの「大また」で踏み切り板を踏み込もうとしている様子が見られる。「踏み切りを右足に合わせる」という意図と同時に、「踏み切り板を強く踏む」という意図が感じられる。「右足で強く踏むこと」で「遠くへ跳ぶ」という課題意識による動きの探究である。第二時から第四時まで、この「大また」での踏み込みが何度も試技された。

写真I (大またでの踏み込み a=第三時 b. c=第四時)



しかしながら、Aさんが取り組む「踏み切り板を強く踏む」ための「大また」の動きは、跳躍の記録の伸びにはなかなか結びついていかず、逆にその動きが、踏み切った後の空中姿勢においても、足が前に上がっていない（跳躍の際に高さがでない＝距離がでない）ことにつながっている状況にもあった。そうしたとき、Aさんは自分の相棒から「足を前に出す（上げる）練習をしようよ」といった言葉を掛けられ、それに応じて写真Jにあるゴムのロープを張った練習場所での練

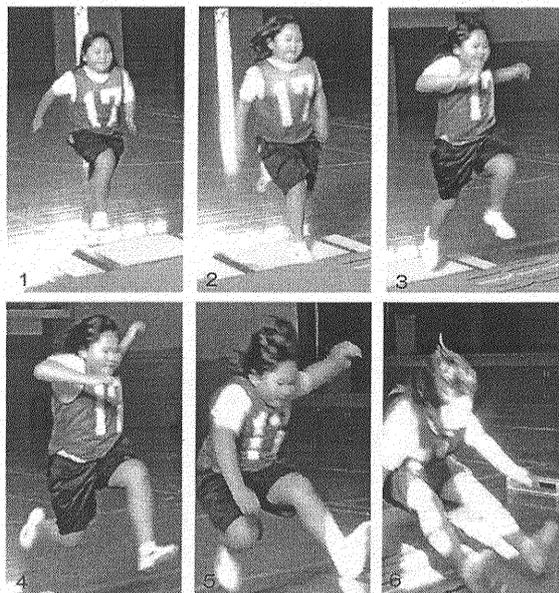
習を開始することになった。そこで、振り上げ足を前に出して(上げて)いく動きの効果を確認していった。

写真J



ゴムのロープを張った練習場所では、必然的に「ロープに足を引っ掛けないようにするために、足を前に上げて、高く跳ばなくてはいけない」という意識を持たざるを得ず、それにより、写真Jのような「振り上げ足が前に上がっていく動き」は生まれやすい。とはいえ、スムーズな「足を前に上げる動き」のためには、「足を前に上げやすくするための、踏み切りの動き」にも意識を向けなければならないことをAさんは感じているようであり、Aさんはこの2つの動きをスムーズに行うため、その探究の試技を何度も繰り返した。

写真K (1から6への連続写真)



試行錯誤の結果、踏み切り板への踏み込みは、写真Iに見られる腰が伸びきった「大また」の状態において踏み切り板を踏みつけていくというのではなく、腰を少しだけ落とした状態で足を運び(写真K-1,2)、その足を踏み切り板のう上に駆け上がっていくように載せながら力強く踏んでいくという動きの方が、踏み切りがスムーズになり、空中でも足を前に上げやすくなるということ、学んでいった。第4時の終盤の試技である写真Kは、その学びの成果としての跳躍ともいえ、この跳躍の記録は、Aさんのこれまでの最高記

録となった。なお、この第四時の写真Kの跳躍が、全7時間の授業の中でも、最も長い距離を跳んだものとなった。

今回のAさんの学びの中にある成果と課題が、今後の上の学年での走り幅跳びの授業につながっていくことが期待される。

<Tくん(1番)の豊かな動きと学び>

① 踏み切りの方について

Aさんの相棒でもあるTくんも、準備運動を行い、今回の走り幅跳びの授業の進め方や安全のためのルールを確認したのち、学びをスタートさせた。

第一時では、早速「遠くへ跳びたいな」という思いを膨らませ、「どうしたらもっと遠くへ跳べるのかな」と問いを持ち、助走の距離を、5m、10m、16mと少しずつ伸ばしながら試技を重ね、「長い距離からの助走が、遠くに跳ぶことにつながるのではないか」というTくんの動きの探究が行われていった。

ただ、16mからの助走に取り組むものの、その助走スピードは全力疾走というものではなく、「中程度のスピード」の、力を加減した助走であった。この時点のTくんの踏み切りは特徴的であり、いわゆる「ギャロップ」の足さばきによる踏み切り(写真L)となっている。「遠くへ跳ぶため」に、この時点では他の踏み切りの方法が無いTくんにとっては、「ギャロップ踏み切り」を成功させる必要があり、そのためにも「中程度でのスピードの助走が適切である」という結果を、これまでの動きの探究の中で導いたものと考えられる。実際、全力疾走での助走も複数回試しているTくんであるが、助走スピードの勢いに体がついていけず、「ギャロップ踏み切り」は出来るものの、その後のマットへの着地に失敗している。このような試行錯誤を踏まえたTくんの学びが、「中程度のスピードでの助走」に集約されている。

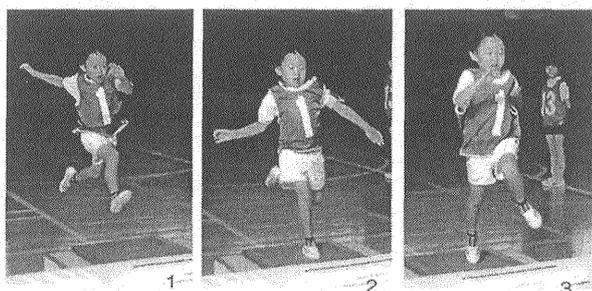
なお、Tくんの「ギャロップ踏み切り」は、第一時の授業中ずっと続いたが、教師との関わりのなかで、どのような練習を行えばいいのかを確認し合った結果、第二時の最初の跳躍からは、その踏み切りは姿を消し、「全力疾走」の助走による「片足での踏み切り」の動きの探究となった(写真M)。ギャロップ踏み切りとは明らかに跳躍の距離が変わったことを実感することになったTくんは、第二時が終わった時のワークシートへの書込みに、『片足だけで跳んだ方が遠くへ跳べた』と記載しており、「片足踏み切りは助走の距離とスピー

ドから生まれる助走の勢いをそのまま跳躍に活かすことができ、遠くまで跳ぶのに効果的である。」ということも学んでいったと考えられる。

写真L (1から3への連続写真：第一時)



写真M (1から3への連続写真：第二時)



② 踏み切り足について

第二時から第四時においては、第二時の「片足踏み切り」の効果の学びを踏まえ、次のような課題意識による動きの探究が行われていった。

それは、「右足と左足とでは、どちらの方が自分の力を最大限発揮でき、結果として遠くへ跳べるようになるのか」、「踏み切り板をどう踏み込めば(踏み切りの強さ)、結果として遠くへ跳べるようになるのか」、「空中姿勢において、振り上げ足をどうすれば、結果として遠くへ跳べるようになるのか」等である。

Tくんは前述のAさん(17番)と相棒の関係であり、動きの探究の進度と方向性が同調することも多い訳であるが、ここにおいても、「踏み切り足」は「左足」がいいのか「右足」がいいのかの選択については、相棒からの観察・評価も受けながら、両方の跳び方を比較するように何度も試し、その試行錯誤の結果、「左足踏み切り」の方が自分に合っていることを確認していった。これ以降の試技はほとんど左足踏み切りとなり、動きの探究として、「左足踏み切りの方が、今の自分の力を最大限発揮できる跳び方であり、遠くまで跳ぶのに効果的である。」ということも学んでいったと考えられる。

なお、Tくんは跳躍の際の両腕の使い方が特徴的であり(写真Lの3、写真N、写真Oの4)、両腕を「バンザイ」のような形で上にあげ、その力をきっかけと

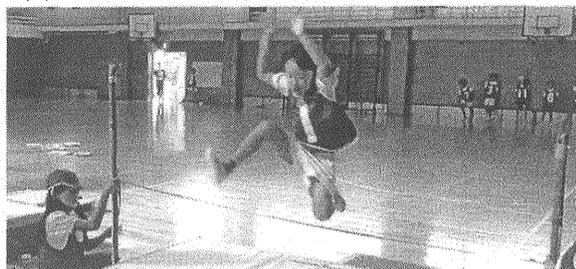
して上半身を持ち上げていくような動きが見られる。本時では、このような特徴的な動きも、子どもの探究の過程のありのままの姿として尊重・認めながら授業を進めていった。

③ 踏み切り板への踏み込み方と空中姿勢について

また第三時から第四時においては、前述の「左足踏み切り」の効果の学びを踏まえ、Tくんの次の課題意識は「踏み切り板をどう踏み込めば(踏み切りの強さ)、結果として遠くへ跳べるようになるのか」というものと、「空中姿勢において、振り上げ足をどうすれば、結果として遠くへ跳べるようになるのか」に移り、それに向かった学びが展開された。ここでも相棒のAさんと同調した動きの探究が行われ、Aさんと一緒にゴムのロープを張った練習場所での練習(写真N)を開始することになった。相棒同士、「足が前に出て(上がった)いるかどうか」、や「助走スピードが適切であるかどうか」について活発な観察と評価が行われ、相棒からのコメントを踏まえた上での試行錯誤が続いた。

この練習の価値については、前述した通りでありここでは割愛するが、振り上げ足を前に出していく(上げていく)動きの効果や、踏み切りの際、腰を少しだけ落とした状態で足を運び、その足を踏み切り板のうえに駆け上がっていくように載せながら力強く踏んでいくという動き(写真O-1、2)の方が、踏み切りがスムーズになって空中でも足を前に上げやすくなるということも学んでいった。

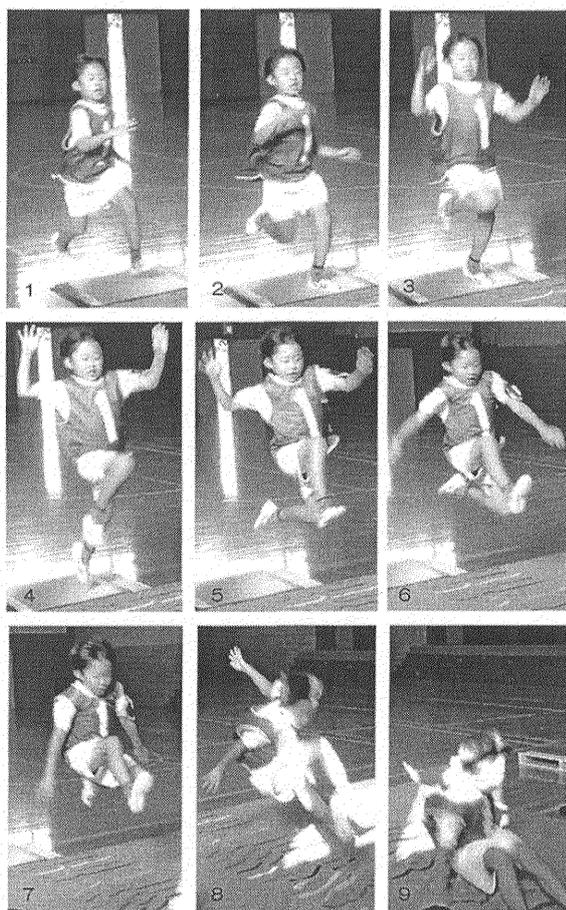
写真N



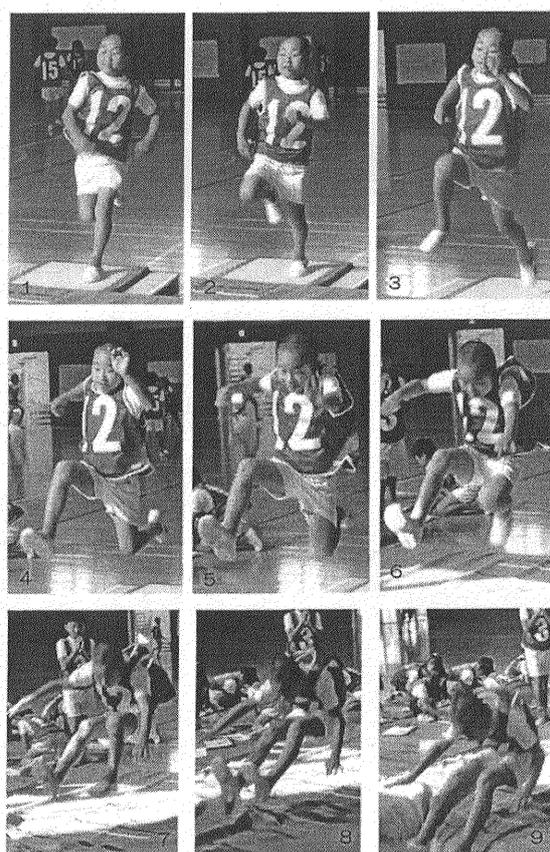
このゴムのロープを張った練習場所での動きの探究は、第四時の多くの時間を費やして行われた。そして、この第四時の最後の試技である写真Oは、これまでの学びの成果としての跳躍ともいえ、この跳躍の記録は、Tくんのこれまでの最高記録となった。なお、この第四時の写真Kの跳躍は、全7時間の授業の中でも、最も長い距離を跳んだものとなった。

今回のTくんの学びの中にある成果と課題が、上の学年での走り幅跳びの授業につながっていくことが期待される。

写真O (1から9への連続写真)



写真P (1から9への連続写真)



<Dくん (12番) の豊かな動きと学び>

① 踏み切り足、踏み切り方、空中姿勢について

準備運動を行い、授業の進め方や安全のためのルールを確認したのち、Dくんの学びがスタートした。

Dくんは地域の陸上教室にも所属しており、走り幅跳びの試合にも出場した経験を持つ。写真Pは第二時の早い段階での試技であるが、経験者ということもあり、そのダイナミックな跳躍が特徴的である。記録を伸ばすことについての本人の意識は強く、ワークシートにも「足を前へ高くあげたい」、「助走スピードを落とさない」、「思いっきり踏み切る」といった端的な言葉によって自分の課題を示し、クラスの仲間全員にも「強く踏み切った方が遠くへ跳べるよ」、「踏み切り後は足を前に伸ばした方がいいよ」と自分の考えを積極的に伝えながら、相棒と協力し、意欲的に動きの探究を行っていった。

ただ、幅跳びについてある程度以上の動きを身に付けているDくんだけあって、「さらに遠くへ跳ぶための明確な課題」というものが設定されにくい一面も見ら

れた。加えて、踏み切りの足については、本人は「左足」を自分の踏み切り足として強く意識しているものの、右足でも左足でもどちらでも踏み切ることができてしまう器用さをDくんがもっており、それが加えて、踏み切り後の動きの探究（主に空中姿勢）を曖昧なものにしている感もあった。先に示した「足を前へ高く上げたい」、「助走スピードを落とさない」、「思いっきり踏み切る」という課題が全体的に意識されているものの、その個々の課題に対しての集中的な探究は低調な状況にもあり、Dくんの学びの姿の一面として、「ダイナミックな跳躍による試技が意欲的に継続される」一方で、結果として「記録が伸び悩んでいる」という状況が第五時の中盤ごろまで続いた。

そのような時間を過ごしたDくんではあるが、第五時の中盤以降は、相棒からの『助走のスピードは良いけど、(跳んだときに)両足が前に伸びなくなって、足が上がっていなかったよ。』という内容の指摘・アドバイスや、教師による「ゴムのロープを張った練習場所」での「跳躍の高さ」についての意図的な関わりを踏まえ（写真Q）、「足を前に上げていく空中姿勢の動き」の探究に、集中的に向き合う学びの機会を得た。

課題を明確にし、それに集中的に取り組むこの探究の時間をきっかけとして、Dくんはそれまで本人が意

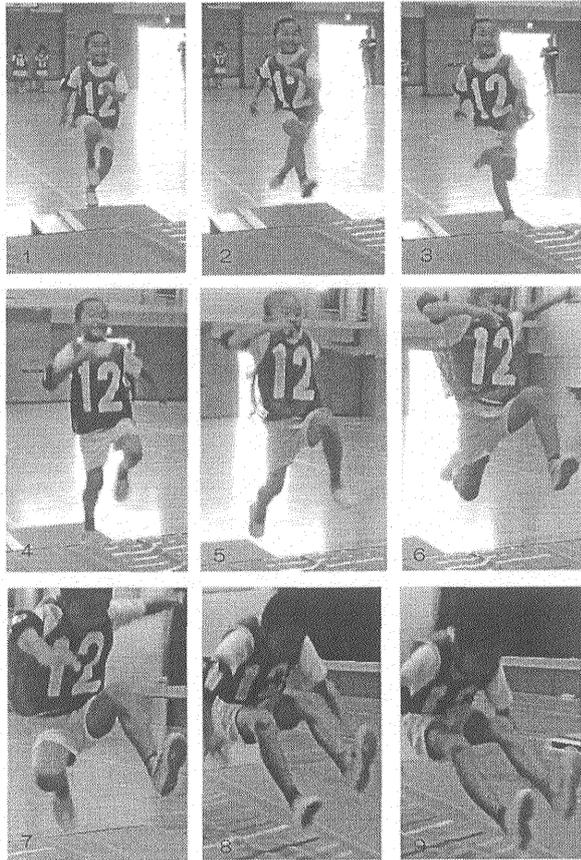
写真Q (1から3への連続写真)



識してきた「自分の踏み切り足は左足」という強い思いから解放されるかのように、「右足の踏み切り」でゴムのロープを越え、左足が前に上がっていくスムーズな跳躍の動きを作り上げていった。この時点の自分にとって、右足での踏み切りの方が、足を前に上げていく空中姿勢を取りやすく、そのことによって結果的に遠くへ跳べる可能性が高くなるということを、ここまでの一連の試行錯誤のなかで、Dくんは学んでいったと言えよう。

これ以降の授業においては、Dくんの踏み切り足はすべて右足となり、これまで（第五時まで）のおおよそ左足右足半々での時と比べ、「自分の踏み切り足は、左足ではなく、右足である」という明確な意識のもと試技を繰り返していることが感じられた。そして第六時の最後の試技では、写真Rの跳躍（右足踏み切り）を行い、これまで記録が伸び悩んでいた状況をいよいよ打開し、跳躍距離の自己最高記録を出すに至った。

写真R (1から9への連続写真)



IV おわりに

本稿では、「どうしたら、もっと遠くへ跳べるかな（幅跳び：3年生）」の授業における子どもたちが織り成す豊かな動きと学びについて、具体的な映像記録（写真）による分析を踏まえながら読み解いていった。

3名の児童の動きの探究に限定した分析ではあったものの、子どもたちが自分自身の課題を見出し、それを探究し解決しながら、遠くへ跳ぶための効果的な動きについて学びを深めていく様子を捉えることが出来た。またそこに、相棒（ペア）との関わりや教師からの適切な支援の価値・重要性についても、あらためて確認することが出来た。

小学校の体育の授業においての、子どもたちの豊かな動きと学びの成立は、様々な要因（学級構成員の人間関係から、子どもの特性、意欲、態度、学級を包む雰囲気、それまでの学習の進捗、また、教師の支援内容、問い、展開、教材、教具、場の設定、等々）が、複雑に影響し合っている結果ではあるが、本稿において具体的な映像記録の分析を踏まえて見えてきたことは、先のIIの章で示した「配慮や支援の内容」が、子ども

たちの豊かな動きと学びを引き出すために、極めて大きな影響を持つということである。

詳しい内容は前述のⅡの章を参照されたいが、どの領域・内容の体育の授業においても、子どもたちの実態を踏まえつつ、意欲的にその運動に取り組みたくなるような場の設定、適切な支援、仲間同士の関わり方、ワークシートの活用等に対する配慮が、子どもたちの向上心を高めさせ、子どもたちの動きと学びを豊かなものへ導くことに大きく貢献することは間違いない。授業研究の重要性をあらためて実感するものである。

また、子どもたちの学びの「発展性」を感じさせられる授業場面がいくつかあったが、そのひとつが、跳躍において最高記録を出した時の、子どもたちの動きである。それは、踏み切り前の助走における「最後の一步の歩幅」についてである(写真K-1, 2, 写真O-1, 2, 写真R-1, 2)。一般的に走り幅跳びの競技では、踏み切りの前の最後の一步(あるいは数歩)を、それまでの助走の歩幅より狭くすることが多い。跳躍の距離を伸ばすための技術・技能であるが、今回の3年生の授業では、その発達段階を踏まえ、教師はそのことについては一言も言及していないし教えるでもない。そうであるにも関わらず、子どもたちは跳躍の時に足を前に上げていく動きを探究する「ゴムのロープ」を越えていく試技のなかで、副次的にも「助走の最後の一步」の重要性を自ら感じとり、その一步を狭くすることで、結果的に「遠くへ跳ぶ」「高く跳ぶ」ことを実現させていったのである。教師の期待・予想を上回る探究を行い、「遠くへ跳ぶ」ための効果的な動きを学んでいった子どもたちの姿には、ただただ驚かされた。見方を変えれば、「ゴムのロープ」を越えていく課題・動きに、それまで意識されなかった子どもたちの身体感覚を呼び覚ます効果が秘められているとも考えられ、このような練習課題の開発研究を今後さらに進めることは、授業研究においても有意義なことであると思われる。

なお、今回の幅跳びの授業は体育館での実施であったが、ケガの発生のリスクを最大限に低減させるための安全対策を講じたことについては、Ⅱの章で述べたとおりである。対策の甲斐あって今回の全7時間の授業では大きなケガの発生は無かった。屋外の砂場であれ、今回のような体育館での授業であれ、その場に応じたケガ防止のための細心の注意を払う必要性については、変わりはないと思われる。その意味では、安全対策を講じることが出来れば、中学年段階での体育館での幅跳びの授業は実施可能であり、本稿で示した子どもたちの豊かな動きと学びの姿からも、それによるメリットは大きいものがあると言えよう。

最後に、本稿の教育実践研究においては、その授業の指導案の作成から授業開発・授業実践に関することは望月正が担当し、撮影・映像分析とその記録・記載等については赤田信一が担当した。附属静岡小学校と大学との協働的な教育実践研究を行えたことを、大変嬉しく思う。

謝辞

授業開発・検討にあたりご丁寧なご指導ご助言をいただきました静岡市教育委員会の門間一徳先生、また、協力委員の各先生方に対しまして、心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、教育実践の研究論文作成にあたり、授業中の写真の掲載をお許しいただいた児童の皆さんとその保護者様、また学校関係者の方々に對しまして、心より感謝申し上げます。

注1)

子どもの幅跳びの目安となる目標記録の算出については、今回は以下の方法で行った。

$$\text{目安 (cm)} = \text{立ち幅跳びの記録 (cm)} \times \text{スピード指数}$$

50mの記録	スピード指数
7 秒台	2
8 秒台	1.9
9 秒台	1.8
10 秒台	1.7
11 秒台	1.6